

多くの方々のご協力を得て、ここに「日弁連七十年」を刊行します。

日弁連は、ほぼ10年ごとに、その活動の足跡を記録するために、記念誌を発行してきました。本誌も基本的にそれを踏襲し、この10年日弁連が取り組んだ課題について、その分野に造詣の深い会員に執筆をお願いしました。

第一章「日弁連の会員と組織」、第二章「司法制度改革の課題に関する取組」、第三章「人権課題に関する取組」、第四章「業務改革課題に関する取組」、第五章「その他弁護士制度に関する取組」に大きく分け、各章をさらに細かく分けました。これに、2つの特集（災害復興支援及び取調べの可視化）と6つのコラム記事を加えました。全部で56本の原稿を合わせたものとなり、共同執筆を含め延べ96人の方々に執筆いただきました。さらに、この10年の年表を付しました。

対象期間は、2009年1月から2018年12月までとしました。もっとも、項目によっては、対象期間後脱稿までに生じた動きを書いておいた方がよいと執筆者が判断したものについては、何らかの形で原稿に反映しているものもあります。

各執筆者には、担当項目について対象期間に生じた重要な事項について客観的事実を中心に書いていただくとともに、できればその中の最重要項目については相当なウエイトを置き、かつその日弁連における評価を加えていただく（それが定まっていなければ担当委員会や担当者の評価、大きく評価が分かれる場合は対立評価も紹介いただく）ようお願いしました。

これまでの記念誌と変わったところは、第一に横書きとしたこと、第二にコラムという形で「旧会館時代の思い出」「大岡越前屋敷跡の記念碑」「日弁連広報キャラクター『ジャフバ』のひみつ」「どちらが本当の『中弁連』？ 決戦は秋の弁連大会で」「企業内弁護士の存在感」「任期付公務員の業務とやりがい～自治体コンプライアンスの実現に向けて～」という6本の小原稿を加えたことです。

この種の記念誌には少なくとも三つの価値・意義があります。一つは、資料的価値。そのために、前記の通り、執筆者にはできる限り「客観的」な記述をお願いしました。二つは、このようなものを作成すること自体日弁連として一つの時代の意識的総括作業であること。そして三つは、書棚の飾りになること。三つ目の価値を見出す会員（特に若手会員）がどれだけいるかわかりませんが。なお、本誌の内容は日弁連ウェブサイトでも閲覧することができます。

事務総長を退任してすぐ本誌の編集の責任者となることを依頼されました。本誌編集にあたっては、大掛かりな委員会・ワーキンググループ組織とはせず、日弁連広報課・室、事務総次長経験者、広報室長経験者を中心に機動的な編集グループで数回集まって企画、執筆依頼、原稿校閲等の作業を行いました。現総次長や各項目の担当事務局にも多大なご協力をいただきました。おかげさまで編集は円滑に進み、刊行に至りました。

執筆・編集にご協力いただいた方々にこの場を借りて御礼申し上げます。

日弁連七十年記念誌編集チーム座長
出井 直樹



見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

みんなの文字®

この冊子に使用しているフォントは、みんなの文字を採用しています。
みんなの文字は、一般社団法人UCDAが「読みやすさ」を認証した書体です。

日弁連七十年

2019年12月1日 第1版第1刷発行

編者 日弁連七十年記念誌編集チーム

発行者 日本弁護士連合会事務総長 菰田 優

発行所 日本弁護士連合会

東京都千代田区霞が関 1-1-3

電話 03 (3580) 9841 (代)

印刷 東洋美術印刷株式会社

©日本弁護士連合会 2019

